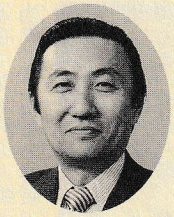
幽玄

題字
高秀秀信横浜市長

横浜能楽連盟
会報　No.11
平成8年7月7日

横浜能楽堂への道



横浜能楽連盟
会　長
新堀　豊彦

横浜に能楽堂を、という思いは、伊勢山皇大神宮にあった能舞台が、関東大震災によって焼失して以来の悲願だったといえるだろう。それはまさに長い道程であった。

第二次大戦後、多分、日本中のどこよりも早く、昭和二十三年七月「横浜能楽謡曲連盟」が中村桃山氏の呼びかけによって発足したのが、おそらくその根っこになったといえるかもしれない。既に四十三回の演能の歴史をもつ「横浜能」が、一回も欠けることなく、五流の宗家と地元愛好者と横浜市が一体となって継続出来たという事実は、横浜に能楽堂をつくるための、大きな素地になっていたことは間違いないであろう。

そして、地元横浜の観世流能楽師田辺竹生師は、昭和四十八年十一月に、宝生会の倉庫に眠っていた、旧前田公の舞台（染井能楽堂）を、そのまま入手され、田辺師の富久謡会々長であった太田武雄氏によって、横浜能楽堂建設促進委員会が五十二年に設立された。田辺師は五十四年に染井舞台を横浜市に寄贈された。

当時の能楽連盟（会長庄司清夫氏）と富久謡会による市民への一大署名運動が展開され、五十五年九月に、当時の飛鳥田市長のもとへ、五万六千余名の署名簿をつけて、建設促進の陳情が行われたのである。

そして昭和五十九年、横浜財界の中枢を先頭に「建設促進会」が改めて再発足する。（会長上野豊横商会頭）。当初細郷道一市長は慎重であったが、促進会が一億円募金活動まで展開することによって、建設の方向で事務当局（市民局文化室）に指示を出す。

細郷市長の頭の中には、その頃から「掃部山公園」が「みなとみらい21地区」の後背地というイメージ、歴史性と国際性をかねた適地として考えられていたフシがある。

残念ながら細郷市長は急逝されたが、後任の高秀秀信市長は何と国立能楽堂建設時の建設省の責任者で、能楽堂そのものを熟知されているというラッキーな偶然が重なる。

当時の促進会は、坂本寿（日発会長）、野並豊（崎陽軒社長）氏ら謡曲の愛好者で、かつ、横浜財界をリードする実力者が副会長をつとめられ、さらに川本譲次氏（横商副会頭）を加え、一億円の募金を成功に導かれたことは、市の決断をうながすのに大きな力となったことは間違いない。一方、その裏方として、細郷、高秀両市長と親しい瀬田良市氏（湘南病院理事長）のかげの協力活動、そして私も、市会すじへの陳情を裏表とくり返し、この間、滝沢量治、中島行雄両氏二代にわたる促進会事務局（全くのボランティア）の努力のかいあり、平成三年、ついに掃部山公園内への能楽堂建設が決定されたのである。

この時すでに太田、坂本、庄司氏らなく、一抹のさみしさを禁じえなかったが、以来、建設は順調に進み、ここに平成八年六月二十八日、開館式典、二十九、三十両日にわたり、舞台披き記念能が各家元の総出演によって開催されたのである。

思えば二十余年、よくぞここまでたどりついたといわざるをえない。私自身は昭和六十年に連盟会長に就任してから、当面の衝にあたるようになったのであるが、それでも十余年お手伝いしたことになる。

感無量としかいいようがない。

完成した能楽堂は、国立の建物より小ぶりであることを除けば、すべての点で趣向がこらされ、文字通り日本一といえよう。そして何よりも関東最古の歴史と伝統をもつ、染井舞台の再現であることがすばらしい。

その舞台で初舞台をふみ、現在能楽師として第一線で活躍されている先生方にとっても、この舞台は特別な意義をもっている。古い歴史が、今新しい、よそおいで生れかわる。この奇跡的といってもよい再生を実現させて頂いた、横浜市、細郷、高秀両市長をはじめ、市民局の担当部局、御協力賜わった市民の皆様に心から感謝すると共に、そのすばらしい舞台を十分に使いこなし、最大限の利用率をあげることに努力しなければならないと思う。

横浜能楽連盟の使命は、この重責をにない、横浜市民の期待にこたえることである。

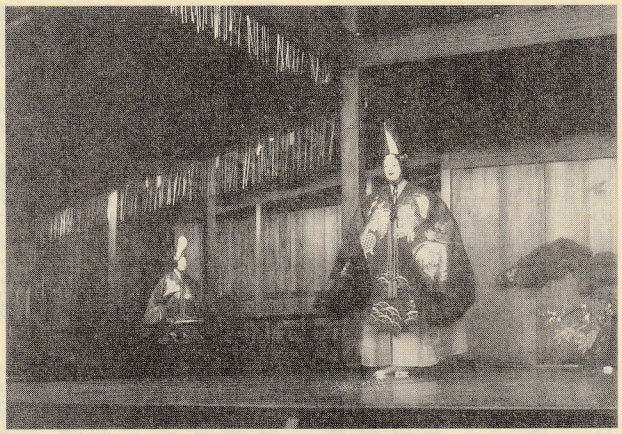
横浜能楽堂と私

横浜能楽堂
館　長　山崎有一郎

横浜市民の待望久しかった横浜能楽堂の建設運動が起こった事を伺い、我が事のように嬉しくなったことでした。及ばずながらご協力を惜しまずに今日までやって参りましたが、図らずも館長の大役を仰せつけられ、非才の身にお受けしかねたのですが、所縁のある能舞台のことでとてお引受け致しました。何とぞ宜しくご指導と、ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

所縁と申しますのは、明治八年根岸に建てられた加賀藩主前田齊泰公の能舞台を公の逝去後同じ宝生流の松平頼寿公が、御母堂の隠居所を東京駒込の染井に建てられるについて、根岸の舞台を譲り受け、楽屋・見所を付けて能楽堂の形にするようにと亡父静太郎（楽堂）に依頼されました。

御母堂は茶人でもいらっしゃったので、能舞台は今のままにして手を加えずにし、新しく加える楽屋は茶室に使えるようにと依頼されましたので、見所も数寄屋風に纏められました。周りはガラス戸が嵌められ、自然光線が射し込み、冷暖房の無かった頃だけに、木の間の風が快く吹き抜ける爽やかさでした。



旧染井能舞台

の舞台だっただけに、藩の紋でもあり、藩祖菅原道真公に因んだ梅花が鏡板の老松とともに描かれているのは、当舞台だけで大きな特色と言えましょう。又水引貫の上の蟇股もスマートな松葉になっているのも松平家に因んでのことと思われます。

本舞台の下を初め囃子座・橋掛りに、それぞれ大きな甕がいけられていました。甕をいける異様な光景に、子供心に強い印象を受けたものです。子供なら十分に入られる大きな甕で、大きな穴を掘って数本の丸太に銅線で吊るすのですが、甕の向きを決めるのが大変でした。今の新しい能楽堂の舞台下には吸音器具が装置されるようになり、古風な甕は何処でも使われてはいないようです。

関東大震災でも無事だった染井の舞台は、戦災にも会わず、都内で三箇所残った能楽堂の一つでした。一番足場の良かったせいか、戦後は各流儀の名人たちが競って名舞台を展開、華やかな一時代を作ったものです。

これが大正八年のことです。

無論、見所は畳敷でしたから履物は脱いで座るのですから、当然、下足番も必要でした。舞台には手を入れていませんので根岸から格天井のままの舞台では「道成寺」は演じられませんでした。平成八年、横浜に移されて釣鐘用の滑車も付けられ、「道成寺」の上演も可能となりました。「八」が三つ重なり、末広がりのめでたいお話です。

既に百歳以上になった老舞台ながら、しゃきっとした佇まいは他の能楽堂に引けを取るものではありません。殊に、前田家

横浜能楽堂の施設・運営について

横浜能楽堂
管理課長　新井　国徳

幕末の横浜開港の立役者・井伊掃部頭にちなんだ掃部山公園。その掃部頭の銅像のそばに六月二十八日、横浜能楽堂が開館しました。

この能楽堂の特徴は、何といっても一階の本舞台。この舞台は、元々は明治八（一八七五）年に、駒込の旧加賀藩主・前田家の隠居所に建てられたもので、大正八（一九一九）年に染井の旧高松藩主・松平邸に移築され、「染井能舞台」として親しまれました。

東京の能舞台は太平洋戦争で大きな被害を受け、残ったのは、染井、多摩川、杉並など僅か。その中で、「染井能舞台」は地の利の良さから、利用されることも多く、昭和二十年代には幾度も名演が繰り広げられました。

しかし昭和四十（一九六五）年には、惜しまれながら解体され、部材は保存されました。

この歴史的な能舞台が「横浜能楽堂」の本舞台として蘇ったのです。

この舞台の鏡板は、松のほかに梅が描かれた珍しいもの。この梅は、前田家の祖・菅公（菅原道真）にちなんだものと言われています。

一階の本舞台は、広さ五・九一メートル（京間三間）四方。橋懸りは幅二・四二メートル、長さ一〇・二六メートル。鏡の間は約二十畳、装束の間は十畳、百十八席、脇正面百十三席、二階席四十七席、合計四百八十六席の本格的なもの。

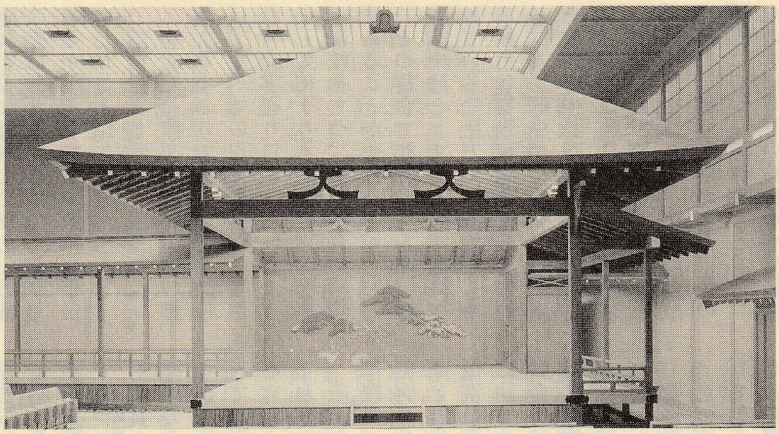
また「国際文化都市・横浜」の能楽堂らしく同時通訳の設備も完備されており、近くにある国立国際会議場で開かれる会議等のアフターコンベンションにも利用できます。

能楽堂でも年一回程度、外国の方々向けに英語の解説を入れた主催公演を予定しております。外国への能楽の発信基地としての役割も担ってまいります。

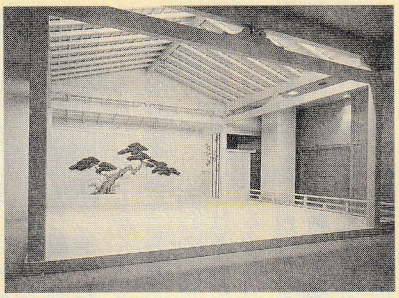
地下の第二舞台は、橋懸りこそありませんが舞台の広さは本舞台と同じ。鏡板は本舞台の鏡板を描かれた当時の姿で模写したもの。本舞台の鏡板と比べてみるのも一興かもしれません。仕舞、謡等のお稽古ばかりでなく、カーペット敷には最大百人まで座ることができますので、発表会にもご利用いただけます。

二階の研修室は四部屋あり各室約十二畳。お稽古、研修等に楽屋は四部屋あり各室約十畳、焙じ室は約三・五畳。本舞台利用のない場合は、楽屋のみの利用もできます。

見所は正面二百八席、中正面



横浜能楽堂本舞台正面


第二舞台

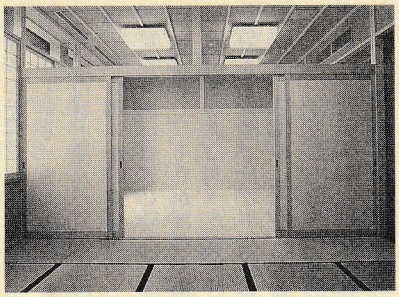
ご利用いただけます。一部屋は板貼りで仕舞のお稽古に最適です。

以上の施設は有料でご利用いただくことになりますが、そのほかにも能楽への理解を深めていただくため一階玄関広間脇に書籍や雑誌が閲覧できる情報コーナー、二階に展示廊が設けられています。展示廊では、能面、装束など基本的な資料を展示し初心者の能楽へ理解を手助けする「常設展」のほか、貴重な資料をお借りしての「特別展」も年一回程度行います。

さらに、二階には喫茶室も設けられ軽食をご提供いたしておりますが、おいでの際はぜひ天井にご注目下さい。喫茶室の天井にはかつて「染井能舞台」で使われていた天井板が現代風に再利用されています。「染井能舞台」の天井は、初め能舞台としては一般的な「化粧屋根裏」でしたが、途中で格天井に改造されました。今回の復原ではなるべく建築当初の姿にもどそうと格天井は取り払われましたが、天井板は新たな活躍の場を得たのです。

横浜能楽堂では、能楽の普及・振興のため主催事業の開催も予定しております。主催事業は大きく分けて二つあります。

一つは「公演」。能楽がもつ優れた魅力を鑑賞できる機会を定期的に提供する「定期公演」、能楽の指示層を広げていくため解説付で行う「普及公演」、鑑賞機会の少ない大曲、秘曲に挑む「特別公演」です。様々なタイプの公演を通じ初心者から従来の能楽愛好家まで、さらには子供や学生なども含め幅広い層の方々に能楽へ触れていただくことにより、愛好者の拡大を図っていきたいと思っております。


研修室

もう一つは「講座・ワークショップ」です。初心者、能楽愛好者、外国人のための「能楽講座」、子供の狂言ワークショップなど様々な方々を対象としたものを計画しています。

歴史的な舞台と近代的な設備を調和させた横浜能楽堂を能楽の普及・振興のため、ぜひご支援くださいますようお願い申し上げます。

新能楽堂での「横浜能」

当連盟主催の第四十四回「横浜能」は芸術の秋たけなわ十一月八日（金・夜）と十一月九日（土）の二日間に亘り待望久しき横浜能楽堂において開催されます。

「横浜能」は昭和二十八年に記念能が開かれて以来毎年、時の一流の能楽師を招いて横浜市民に高レベルの演能観賞の機会を提供してまいりました。しかし横浜には本格的な能舞台がなく、第一回の国際文化会館に始まり、その後神奈川会館、県立音楽堂、県立青少年センター、横浜市民文化会館関内ホールといつも仮設能舞台での演能であり、演者にとっても又観客にも充分な環境とは申せませんでした。

第四十四回以降は、おそらく現在の最高の能舞台と思われる「横浜能楽堂」での開催となり愛好者のご期待に応え得るものと確信いたしております。

新能楽堂は見所が四百八十六席で、従来の会場に比べ客席が半数以下となるため「横浜能」は当面次のような方針にて企画することといたしました。

一、発足時の考え方を継承して高レベルの能を観ていただく
二、開催時期は秋季とする
三、土曜日と日曜日又は金曜日（夜）と土曜日の連続する二日間に二回の公演とする
四、一回の公演は能一番（できれば二番）と狂言一番に仕舞数番とする
五、能の演者は五流一派から二流に交互にお願いし、他の四流は仕舞又は舞囃子等に出演していただく
六、観能券は二回の公演に別けて発売し、料金は極力おさえてなるべく多くの人に観賞していただく

大略、以上の方針でありますが、出演する各流の能楽師のご都合や能楽堂のスケジュール等により、右の方針通りにできない場合は会報「幽玄」等を通じてお知らせいたします。

また、二回の公演に分けても観客は今迄より少なくなりますので、収支のバランスは苦しい状況が予想されます。愛好者の皆様からも積極的にご提言をいただき、国際都市横浜に誇れる「横浜能」として継続発展に尽力いたします。

皆様にも一層のご後援を賜わりますようお願い申し上げます。

（横浜能楽連盟理事会）

「謡曲と西行」

観世流 富久謡会　田中　稔

幽玄を辞書によると「趣きが深くて、言葉や形に表しえないさま」とある。能は正に幽玄の世界であろう。今や能楽は世阿弥以来のブームとなり、全国で演じられる数は能が三百番、狂言が二百番、これはプロの出演数で、素人の素謡・仕舞・舞囃子・能等は能舞台を始め、師匠宅・料亭・ホテル等小規模のものを含めると、その数倍に及ぶものと思われる。このように寧日なく演じられる殷賑さは正に俳句熱の隆昌さに匹敵し、特に女性の進出が目立つ。俳句といえば高浜虚子は能の金春八条の弟子であるが、「奥の細道」なる新作能を創作していることは余り知られていない。さて西行が江口の里を訪れ、遊女の宿に泊まろうとしたのを断わられた

時に詠んだといわれる歌に、「世の中を厭ふまでこそかたからめ、かりのやどりを惜しむ君かな」というのがある。またその返歌として「世を厭う人とし聞けば仮の宿に心とむなと思うばかりぞ」がある。この二つの歌の解釈であるが、謡本の解説を見ると、はじめの歌は「出家するのはむずかしかろうが、一夜の宿を惜しむとはあまりの人だ」とある。これによると前句の「かたからめ」を「むづかしい」という意味に解し「出家するのは難業だが」と言っているが出家が難業だというのと、後句の宿を断るというのと、どうかかわりがあるのか、どうもはっきりしない。ところで実は初めの歌も次の返歌もいずれも西行の作であって、西行自身の心情を詠んだと解さねばならないのである。その心情とは世の誘惑について勝とうとする心と、負けるのではないかという心との葛藤を指していると思われる。西行なる人物が実際にどのような人であるかはともかくとして、この江口の里での二つの歌に関する限り、そこに西行の心の中の複雑な葛藤もしくは矛盾が詠まれていると思われる。江口に限らず他の曲目でも西行が登場するものには心の葛藤を主題にしたものが多い。例えば「西行桜」では隠遁の静寂と、群衆の喧騒との矛盾が桜見物に因んで語られている。また雨月では淋しい雨の音と澄んだ月の眺めといずれを選ぶかの迷いが語られている。西行は若い時高貴の女御に懸想し、それがばれて悩みの末出家の道に入ったといわれている。世間ではこの西行（佐藤義清）懸想のことを「阿漕々々」といったがそれは「阿漕」という漁師が伊勢の海の密猟の度重なるのがばれて、処罰されたという故事に因んだ世間の流言である。その人物の評価は凡人の目からは測り難いものがあると思われる。謡曲での西行はこの心の葛藤を歌で詠むという、芸術の世界を通じて解決しようとしている。しかも江口の遊女が白象に打ち乗る普賢菩薩となるのであるから、芸術と宗教との、または美と聖との結びついた世界に救いの道が求められているともいえる。それは「歌の徳」であり、また謡曲の心でもある。

能楽連盟入会のご案内

能楽堂開館を機に広く入会をお奨めしております。

お申込みは事務局または各流代表役員まで。

個人入会金　一、〇〇〇円
個人年会費　一、〇〇〇円

会員の声

横浜能楽堂の完成に寄せて

横浜梅若連合会　杉山　淑朗

関東一円では最も由緒ある嘗ての染井能舞台が、此の度横浜市営能楽堂として甦った。

極限まで磨かれたスケールの大きい世阿弥の舞台芸術は時代を超えて現代に聳え、私達は斯道を趣味として人生を学び、福運を享受している。

「命には終りあり、能には果てあるべからず」と「花鏡」で説いた世阿弥の芸術論が六百年後の「横浜能楽堂」に具現し、真正面から関わり合っていることは特筆に値する。

長年歴史的建設事業に情念を燃やされた方々に心から敬意を表す次第です。

横浜能に期待する

喜多流　今冨　博愛

この六月、紅葉坂に横浜能楽堂が開館する。私ども謡曲愛好者にとっても喜ばしいことだ。

昨年五月の本紙に新堀会長も述べられていることだが、これを機会に、横浜能に同好者が多く参加するようにしたいものだ。

私の知る同好グループがあるが、それは可成り長期間続いているが、能舞台を利用することもないようだ。

連盟も工夫をこらして、市の公報とか、知りえたグループに直接呼びかける等して、費用にも配慮したうえ気楽に参加できるようにお考えいただければ、一層発展するのではないか、と思う。

能楽堂と音楽堂

喜多流　大舘　懌雄

私が会社に入社した時に、県立音楽堂が完成した。この音楽堂は、当時世界でも音響効果では指折りのホールと言われ、木の香のただようコンサートホールは、横浜の文化のシンボルであった。私もここには実によく通い、ステージにも何度か出て、若い日の生活の一部のような存在であった。

奇しくも、会社生活もフィナーレ近くになって、同じ掃部山に美しい能楽堂ができ上った。この二つの建物は、まるで自分の人生そのもののようで、感無量のものがある。

私の願いは、由緒ある鏡板を使ったこの能舞台に、いつ行っても能囃子が響いてくるようになることである。

たとえば、あの横浜能を、毎月ここで演じてほしいと思うのは、夢にすぎないのだろうか。

編集後記

待望の能楽堂が完成し、去る六月二十八日から三日間、五流一派の宗家総出演という豪華な舞台披きが行われました。私共の「幽玄」も開館を祝い、記念特集号と致しましたが、新堀会長の建設の経緯、今後の抱負、山崎館長の「八が三つ重なる」おめでたいお話、能楽堂運営を直接担当される新井課長の施設及び運営についての解説等、特集号にふさわしい結構な記事をいただき、心から御礼申し上げます。また、気にかかるこれからの「横浜能」の運営方針については連盟理事の説明が大いにお役に立つのではないかと思います。恒例の随筆の他に、「会員の声」を三編採用させていただきましたが、この欄は今後も続けて行きたいと思いますので積極的に御投稿下さるよう、お願い致します。（N記）

横浜能楽連盟　連絡先
◉文書郵送又はFAXの場合
〒233横浜市港南区丸山台二―二九―一七　新堀方
FAX　〇四五―八四四―二九〇三
◉電話の場合
横浜能楽堂　佐藤正美
TEL　〇四五―二六三―三〇五〇